

どこでもみれる？

コモンディジーズとしての 感染症アップデート

2023 年末～2024 年を迎え、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の出現から 5 年目に突入した。

この感染症に対し、人類は現代医学の総力を投入し、わずか数年のうちに新規のワクチンと治療薬を複数開発し、また重症化の病態や感染様式も詳細に解明され、大規模臨床試験を通じて治療戦略も見出されている。

結果としてウイルスの変異もあるが、当初より死亡率は大きく下がり、本邦においても 2023 年度に 5 類感染症に分類され、全数報告から定点報告となっている。

COVID-19 は一般的な感染症となったが、依然として流行を繰り返して多くの感染者数が報告されており、もっともよく見かけるコモンディジーズとなっている。

この数年来の感染対策により、ほかの感染症の発生も抑えられていたが、現在はインフルエンザはもちろん、アデノウイルス感染症、RS ウイルス感染症、麻疹などの同時流行も見られ、プライマリ・ケアの現場における感染症診療の比重は増えることはあっても減っていない。

梅毒の潜航的な流行も続いており、エムボックス（旧称：サル痘）のような新興感染症も出現している。また、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染症、抗酸菌症、耐性菌感染症の問題も終わっていない。人類の社会活動が再び活発になれば、輸入感染症も増えてくるだろう。

しかし、COVID-19 に翻弄されている医療現場において、この数年間での他の感染症疾患に関する知識のアップデートや復習を効率よく行うことは困難であろう。

そこで今回の特集では、プライマリ・ケアの現場において、COVID-19 とその他の

感染症を鑑別するとともに、質の高い診療が提供されることを目的に企画編集を行った。

座談会においてはコロナ禍において広く情報発信を行ってこられた忽那賢志先生と知念実希人先生をお招きして、この数年間の振り返りと今後の感染症診療の展望を語り合った。

本特集が、COVID-19 がコモンディジーズとなったプライマリ・ケアの現場で少しでもお役に立つのであれば幸いである。



岡 秀昭

(埼玉医科大学総合医療センター総合診療内科・感染症科)